

〈翻訳〉

性差およびその有機的自然に及ぼす影響について
 Ueber den Geschlechtsunterschied und dessen Einfluss
 auf die organische Natur

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト 著
 Wilhelm von Humboldt

杉田 孝夫・菅野 健 訳／杉田 孝夫 解題

何よりも性の違い¹があるということの理由としてその究極目的²を重視するあまり、性の規定がその究極目的にのみ限定される傾向がある。この究極目的が直接、性の概念のなかに取り入れられると、この「性の違いを設けたという」自然の計らいは、生殖に不可欠な手段以外の何ものでもないものと考えられることになる。そうすると、もしも生殖が他の方法で維持されるのであれば、性の違いは容易になくともよいものと信じられることになるかもしれない。というのもこの性の違いが、「人」類としての発展を個々人において妨げている場合が稀ではないように思われるからである。とはいえせいぜいのところ、人間に関してはまた、一方の性が他方の性に及ぼす有益な作用についてのきわめて一般的な考察が、むしろ注目されるだけである。しかし、他の自然界においてもまた、「性差という」この現象は同様に明白であり、性の概念をその究極目的に限定する制限された領域をはるかに越えて、際限のない領域へと移し換えるためには、それ相応の思考の努力が必要とされるのである。自然は、その究極目的がなければ、自然たりえないであろうし、自然の歯車は止まってしまうであろう。そしてこの「性の」違いの代わりに、退屈で、緊張感のない均一性が現れるならば、ありとあらゆる存在を結びつけている動きも、それぞれ個々の存在に独自の活力を備える必要を強いる闘いも、終わってしまうであろう。

自然は、何か無限なものを志向しているのである。自然は、有限な力のなかにあるありとあらゆる偉大なるもの、卓越せるものを、例外なくしかも一つの全体に統合されたものとして、所有しようとするのである。しかし、これらの力は、常に有限なものであり、時間の法則に拘束されているのだから、ある力が働いているかぎり、その力は他の力を打ち消すことになり、それらの力がすべて同時に作用することは不可能なのである。しかしこのことは、ただ単にそれら個々の力にのみ当てはまるだけでなく、そもそもそれらの力の二つのもっとも重要な作用のあり方、つまり個々の形成と全体の結合にも当てはまる。なぜなら力の行使が素材の性状によってもたらされる一面性（Einseitigkeit）を生み出す一方で、結合する形式は多面性（Vieldeutigkeit）を要求し、一方の要求は、まさにそれが生ずる瞬間、必然的に他方の要求を打ち消すことになるからである。すなわちもしも有限性という制限があるにもかかわらず、無限の作用が生ずることになるというのであれば、そこに残されているのは、互いに同時には相容れることのない諸特性を、異なった力へと、あるいは少なくとも、同じ力の異なった状態へと分離し、それらを互いに強く希求させることによって、相互作用へと至らしめることだけである。しかしこの二つの特徴はまた、まさしく性の概念が内包している唯一の特徴でもある。なぜなら、性の概念を、それが実際に自然のなかに現れるがままに見つけ出すためには、やはり生殖の概念から出発するの

が最もよく、そうすれば性の概念が、実際のところ生殖には何ら関わることなく、まったく普遍的なものとして捉えられるからである。そして次に、性の概念はまさに異なった力のきわめて独特な異質性を示し、それらの異なる力は、ただ結びつけられることによってのみ、一つの全体を形成するのであるが、さらにこの全体を相互作用によって実際に生み出すべく相互に欲し求めるからである。

なぜなら自然の秘密は、相互作用にのみ基づいているからなのである。異質な素材が結びつき、結びついたものは、再びさらに大きな全体の一部となっていく。そうしてそれぞれの新しいまとまりは、無限に、さらに富める豊かさを包摂し、それぞれの新しい多様性は、さらに美しい統一性のために奉仕するのである。素材と形式 (Stoff und Form) は、きわめて多様に互いに混じり合い、互いの存在を交換し合うのであって、どんなところでも何かはただ単に形成し、あるいは形成されるということはない。そのようにして自然は、同時に統一性と豊かさを獲得するのである。この二つの特質は、一見したところ対立してようでありながら、その実近い関係にあり、一方は精神に快い安らぎを与え、他方は精神を活発な思考へと緊張させてきたのである。

これらの無数の力の魔法のごとき作用に圧倒されるあまり、人間精神は、そもそもこの聖なる暗闇のなかに分け入ってみようとする意欲を失ってしまうのである。それにもかかわらず、人間精神は、みずからの本性によってそれを試みるように促されるのを感じるのである。それならば、その試みが必ずしも失敗に終わるといってもないのだから、人間精神には、さまざまな作用の合流という側面から離れて、個々に作用し続ける力のほうに目を向けてもらおう。人間精神は、あちらにおいては、さまざまな介入によって、未知の、まさに多種多様な形態をとって表れるのを見るのだが、こちらにおいては、個々に、その本来のかたちで再び見ることになるのである。なぜなら、自然におけるあらゆる結びつきは、存在物の内的な性状から生ずるのであり、その静かな作用は、それぞれの自分勝手な恣意を妨げることは決してないからである。互いに一つに結合するものは、その存在それ自体のうちに、この結合を希求する欲求をもっているのである。そして自然のあらゆる現象を規定しているのは、作用する力の性格なのである。しかし方法は、このように単純化しうるのだが、同時にそれが容易なものであると見なされてはならない。この隠されている性格を発見するのは非常に困難なことなのであり、隠されている性格の本質は、あるものがしばしばただ偶然的に表に現すもの^{おもて}の総体のなかにあるのではなく、それら表に現されたもののもっとも奥深いところにあってその存在そのものを形成しているものなのである。それは、個々のさまざまな特徴を断片的に数え上げることで汲み尽くされるようなものではなく、全体的にかつ統一的に捉えられなければならないものである。まさにその隠されている性格は、さまざまな特徴の究極的な結合なのであるから、分離することは許されないのである。それは、内的直観にとっては、ちょうど外的形態ならば目に映しだされるという関係にあり、ほとんどただある種の報復感情 (ahndenden Gefühl) に対してのみ、みずからを現すのである。ともあれ、それは、概念へと還元され、証明されることによって、確認されなければならない。

こうした性格と同様に、あらゆる結びつけられた力の究極的な結果は、再びただ結びつけられた力によってのみ理解されうるからである。調和のとれた結びつきのなかで、感情は思考とともに働く。悟性 (Verstand) が存在の本性と作用のあり方を概念によって探求するのだとすれば、想像力 (Phantasie) は存在の現象の外的なイメージ、つまり存在の内容の形式を捉えるのである。そしてこの二重の結果はただ精神の努力によってのみ結びつけられるのであり、そのようにして得られた統一性こそが、求められているものに多少なりとも相応するのである。それゆえ、探求する者は力のいかなる現象も退けてはな

らない。その力の作用する全領域にわたって、かれはその力を探求しなければならない。身体 (Körper) の世界の探求に際しては、道徳の世界のことに熟知していなければならないのと同様に、道徳の世界の探求に際しては、身体の世界のことに熟知していなければならないのである。そしてかれは大いなる自然の合理性にあるいは人間のより狭い領域に努力を向けてほしい。そのようにして決して全体を見失わないでほしい。なぜならさまざまな対象の外的で感覚的な形態は、かれに一つの鏡を手渡し、かれの目は、その鏡のなかに、対象の内的な性状を見るからである。

しかしとりわけ人間はみずからの道徳的本性 (die moralische Natur) の究明と洗練をめざすうえで、かれをとりまく物理的自然 (die physische Natur) を持続的にかつ真摯に観察し続けることが必要である。そのような配慮と備えがあってこそこうした研究も容易になるというものである。かれは、みずからの道徳的部分において現にあるべく努めなければならないものが、みずからの存在の純然たる身体的部分に、紛れもなくくっきりとした文字で、表わされているのを見出すのである。もちろん観察者がこの文字の連なりをしっかりと見据え目を離さないというようなことはきわめて稀なことである。それどころか想像力の空虚なイメージによって欺かれるのではという用心深い心配は、かえってしばしばそこから注意を逸らしたり、さらにははるかに頻繁に、そもそもただ感情の高まりにすぎないのに、感覚の繊細さが失われないようにと抑制的になったりするのである。しかしそれにもかかわらず、否定できないことは、物理的自然がただ一つの偉大な全体を形成するのは、道徳的本性とともであるということであり、双方における諸々の現象がただ同じ法則に従うということである。それゆえ身体の世界を探求し、精神の内的な生を研究した後に、なお最後に残されているものは、これら両者のまったく異質な領域の相互関係に対する視線である。それはとりもなおさず、両者を支配し、自然全体の最高の結びつきを完結させる諸法則を見つけ出すことにほかならない。これらの諸法則はもちろん常にごくわずかであり、単純なかたちで示されるであろう。というのもそれらの法則はありとあらゆる特殊な法則の豊かな多様性を内包していなければならないからである。まさにそうすることによってのみ、人間みずからもそれらの法則に従い、みずからの存在のまさにきわめて密やかな秘密がそれらの法則においてますます明らかにされるのを、いっそう容易に見て取ることができるのである。なぜならわけても人間の感情や欲求の領域においては、探求する者が直接的にただそこにのみ目を向けるだけでは決して根本を究めることができない深さがあるからである。純然たる物理的自然との親和性があまりに強いところでは、すべてをただ単に人間の道徳的本性によって説明する可能性はなくなってしまふ。それゆえかれは、自然界に戻りつつも同時に、繊細で込み入った有機体のなかで判然としないものを、大きく単純な特徴で表現されているところで探し出さなければならないのである。しかしその時かれは、込み入っておらずより大きな合理性³のなかにある自然に向かう以外に、いったいどこに向かえばよいというだろうか。そこから人間は、みずからをよりよく理解することを学ばなければならず、そこでただ繊細な花が芽生える幹を、探し出さなければならないのである。もしもかれがこれを発見できれば、そのすばらしい構造をもっとも外側の枝々に至るまで辿っていくことはもはや困難ではなくなる。ここが立脚点である。この立脚点に立ってはいじめて物理的自然に精通している者と道徳的本性の探求者が互いに手を差しのべ合うのである。そうして険しい高みを登り、そこからそれぞれが自分自身の領域を新たな姿において、そして今やはいじめて真実の姿において認めるに至るのである。この高みのまさに頂点を極めることは、確かに人間の力には余ることであろう。しかし少なくともその頂点をめざして努力することがなかったなら、そしてその頂点が、双方の領域のそれぞれに従事するに際して、変わることなく保持され続ける視

点でなかったなら、自然に関する知識は、およそ真理といえるものからたちまち遠ざかってしまうであろう。

有限な力によってできていながら、自然は、みずからの形式を通じて、無限性を獲得することを知っているのである。自然の法則に従いながら、消滅していく存在は、活動の舞台を去る前に、自分自身の代わりに、新しい存在を遺すのである。そしてそのようにして個々の個体は、代替わりをしながらも、全体としては連綿と統一性を保ち続けるのである。個体は移ろい去っていくものであるにもかかわらず、類⁴としては永続していくことになるというこの配慮は、自然のあらゆる領域をごく一般的に概観して得られる、最初の現象である。しかし自然の意図は、ただ永続だけに限られているわけではなく、これと同時に何かより高きものに向けられているのである。有限なる存在においては、卓越したものが突然現れるということはないのであるから、自然は有限なる存在を段階的により善きものへと高めていくのである。そのことによって、自然が可能にしたことは、最初の原因となる一投の後には、その仕事から手を引くことができ、今や穏やかなまなざしを存在の連なりに向けるだけでよいのである。今やその連なりは、無限の連鎖のようにして、みずから、しかし常に一つの目標をめざして、急ぎつつ、発展していくのである。われわれが自然のなかに気づくありとあらゆる結びつきのうちで、最高の、最も多様な、最も緊密なものは、この二重の究極目的に捧げられているのである。そして人間精神が、その際に作用するさまざまな力の性格を探求することによって、これらをより正確に見極めることができれば、その時人間精神は、この深遠なる秘密をこれまで以上に正当に賛美することが可能になるであろう。

あらゆる生殖によって生まれるものは、何かそれ以前には存在していなかったものである。創造⁵と同様に、生殖は新しい存在を生み出すのである。創造と区別される点は、新しく生まれるものに先んじて、すでに存在している素材が先行していなければならないということだけである。この必然性にもかかわらず、そのようにして生み出されたものは、生み出したものからは独立した生命の力を有しているのである。そしてこの生命の力は、生み出したものから説明できるのではあろうが、それとはまったく別に、そもそも生み出されたものの存在が、どのようにしてそこから生ずるのかということは、むしろ究明しえない神秘的なものである。発展あるいは成長によって生ずるものは、それが属しているものの一部であり、よそから生きる力を得るのである。しかし、生殖によって生み出されるものは、存在それ自体であり、生命という有機体⁶そのものを所有することになるのである。そして、それは、みずからが生み出されてきた存在であったと同様に、まさに再び生み出すことができる存在なのである。生殖能力は、自然全体にわたっているにもかかわらず、いかなる力も生命という有機体を機械的に形成することはできないのである。いかなる英知も、その道を示すことはできないのである。それゆえ生殖は、その形態はさまざまであるのだが、ただ覚醒 (Erweckung) という呼び方をすることだけはできるであろう。生み出されたもののその後の形成は、それ自身に属するものなのであり、生み出したものに属するものではない。人は、何が生殖に先行しているかを知っているし、その結果生ずる存在を見ることになる。しかしこの両者がどのように結びついているのかということは、見通すことのできないヴェールに包まれているのである。なぜなら、生殖は、生み出される側からは覚醒であるのだが、生み出す存在の側からは、ただ単に全力を最高に振り絞っているということによってだけでなく、またとりわけあらゆる力を統合しているということによって表現される、一瞬の気分 (Stimmung) であるにすぎないからなのである。生ける有機体に命を吹き込む力は、それ自身みずからのなかで^{いっ} (Eins) であるよう

に、ただそれと同じものからのみ生まれうるのである。そしてあらゆる生み出す存在は、みずからと同質の力が最高の調和にいたっているとただ単に感じるだけでなく、すべての生み出すということが、二つの違った異質な原理の結合でもあるということなのである。その原理の一方はより能動的 (thätig) で、他方はより受動的 (leidend) であり、それゆえ一方は (その言葉の狭義的理解において) 生み出す (zeugenden) 原理と呼ばれ、他方はそれを受容する (empfangenden) 原理と呼ばれるのである。そのようにして自然は、有限な存在であるがゆえに、すべてを同時に所有することが許されていなかったみずからの子どもたちに、少なくとも、ただたえずより高次の努力によって得られる統一性を想起させ、それへの憧憬に、自分たちが分離された存在たたくべく宿命づけられているということを忘れさせてくれる瞬間を与えてくれたのである。

身体の世界における類の永続は、この相互に生み出し、受容するという事に懸かっているのだが、それだけではない。最も純粹で、もっとも精神的な感覚もまた、同じ道を辿って生まれるのであり、感性の最も繊細で、究極的な成果である思考でさえも、そこに起源があることを否定しないのである。精神的な産出力は、天才 (Genie) である。天才が現れるところでは、芸術家の想像力においてであれ、研究者の発見においてであれ、行動する人間の活力においてであれ、それは創造的に示される。天才によって生み出されて今あるものは、それ以前にはなかったものなのであり、すでにあったものから、あるいはすでに知られているものから、たやすく導きだされるというようなものではないのである。確かに一貫した論理的つながりが支配していなければならぬ思惟の領域においては、思惟は常に所与のものに結びついていることが示されるであろうが、しかしそうだからといってこの道は、所与のものが見出されえたのとまったく同じ道の延長上にあるわけではない。なぜなら真に天才的なものは、単にすばやく判断され、間接的に関連する諸命題から導きだされるような結論ではないからである。それは本当の発明なのである。たとえ実際にはこの種のものではないものが、同様に、天才に似たやり方で生み出されているということがありうるとしてもである。それに対して、天才の真の刻印が額に印されてあるものは、いわばそれ自体固有の有機的生命をもつ独自の存在とでもいうべきものなのである。それはみずからの本性によって法則を定めるのである。死んだ文字による規則があれば、悟性はゆっくりと概念に基づいて理論を築きあげるであろうが、そうではなく直接みずからによる規則があるのであり、同時にその規則を行使する拍車が存在するのである。なぜなら天性の仕事はどれも再び天才を熱狂させるものとなり、そのようにして天才の系譜は後世に伝えられていくことになるのである。

天才は、熱狂に突き動かされて、みずからの活動が理解できないのである。天才は道なき道を歩き続けているわけではないが、こちらに姿を現すこともあれば、あちらにも姿を現すというわけで、われわれには、かれの動き続ける足跡を探そうとしても無理なのである。それゆえ、かれの生み出すものが、法則性のないものになるのか、それとも規則にのっとったものになるのかは、けっして予測されえないし、ましてや保証されうるものではないのである。みずからが法則そのものになることによって、ただ間接的にではあるが、規則にのっとったものになりうることはあるだろう。そしてかれには、生み出されるものに対して、生み出す瞬間に、生み出すものとしての彼自身の一般的気分による以外には、いかなる影響を与えることも許されてはいないのである。かれの全力はこの瞬間に一つに凝縮されるので、ほんやりとあたりを見回したり、冷静に導いたりする力は何ら残されていないのである。かれの内部では自発性と受容性がともに等しく作動していて、かれが意識する唯一のことは、まさにこの異なる性質の合一⁷なのである。ただこの自発性と受容性との相互作用によってのみ、かれにとって、自分自身の

内部からみずからを示すこと、そして自分自身を、あらゆる偶然性を排して、みずからの反省の対象にすることが可能になるのである。しかし、この分離は、何か天才的なものを生み出す場合にはどんなときでも、必要不可欠なものなのである。というのも天才は、必然的なものをただみずからの理性の深みからのみ引き出し、それを、経験的存在の領域からは完全に切り離し、純粹に抽出することができるからなのである。それゆえ、天才は創造的である限りは、最高の客観性、つまり必然的なものを捉えようとするのが欲求そのものとなる能力を、必要とするのである。しかし天才はこれをただみずからの内部からのみ汲み取ることができるのである。あるいは天才は、むしろみずからの主観的かつ偶然的存在を、必然的存在へと変えなければならないのである。芸術家 (Künstler) であるならば、かれの想像力が、理想的な美を、実際の形態として捉えることができるほどに、それらの特徴そのものを造形的に構想できなければ、傑作 (Meisterwerk) をものにするには決してできないであろう。哲学者 (Philosoph) であるならば、みずからの精神の深みから引き出した真理が、その精神の内的意義を外対象のように捉えることができなければ、観念 (Ideen) を本質的に豊かにする進歩を獲得することはないであろう。行動する人間 (handelnde Mensch) であるならば、かれが世界を越えて彼自身の自我を忘れないのであれば、あるいはむしろかれの自我を世界の大きさにまで広げないのであれば、人生の困難な局面において、相反して作用する原動力によってできたすべての込み入った結び目を、天才的に解きほぐすことなどできないであろう。

新しい存在が呼び覚まされる瞬間よりも、それに先行する状態のほうが容易に観察されうる。創造という厳粛さの気分のなかには、そこで生み出されるものがたとえどのような種類のものであれ、満ちあふれんばかりの豊かさの感覚と欠如の感覚とが結びついているのである。力は内に凝縮しているのであるが、その力は決してみずからを豊かだとも偉大だとも感じることなく、生き生きと活動するものと感じることもなく、このうえなく壮大な活動の準備をしていると感じることもない。この強さを想起することだけでも、その強さをこれから感動的に呼び覚ますことができるのである。しかしこの運動のなかに、生み出すことを喚起する不安な憧憬の萌芽があるのだ。実際のみずからの豊かさにもかかわらず、みずからに満足することなく、その力は、みずからと一体となってようやく完全な全体を形成する何か別のものを、予感するのである。その力が求めているものが、ここで幸運にも見出されると、その力は、ここのあるゆる現存在をすべて消し去る合一を目ざすことになるのである。うねりが生じ、あちらへこちらへと揺れ動き、かの憧憬は、切ない高みへと到達する。一切の期待は、今や生み出されることへと心を燃やす。そしてみずからの自我は放棄され、新たな創造のために自分自身を進んで捧げようとするところまで達する。この最高の存在から存在が飛び出してくることになる。この唯一の瞬間に基づいて精神的な産物も生み出されるのである。芸術家の想像力がひとたびイメージ (Bild) に生命を吹き込めば、たとえかれの手がその瞬間硬直していたとしても、それで傑作は完成しているのである。本当の表現は、ただなお、あの決定的瞬間の余韻と結びついているのである。

互いに必要不可欠で、激しく求め合う力であるのに、分かれて存在しなければならず、結びつくべく定められているのに、一つであることができないとは、奇妙な現象である。なぜなら至る所で、われわれは生み出すため (生殖) には、二つの異質な力が必要であることを知っているからである。これらは今、自然の一部におけるかのように、一つの存在として結びついているのかもしれないし、あるいは二つの違った存在として分離しているのかもしれないのである。生み出されるものは、生み出すものと、常に同質であり、類似しているのであるから、なぜ直接生命から生命が、ある力から別の力が、生み出

されえないのかは不思議なことのようと思われる。そして純粹な力の概念は、ここでは何ら矛盾するものを含んでいないのだから、われわれは、このことを力の枠組みのなかで、探求しなければならないのである。

あらゆる有機的存在に生命を吹き込む生き生きとした力には、身体が必要である。この身体とその力はたえず結びついており、相互に作用し合っているのである。だから、あらゆる有機的存在において、作用と反作用とは結びついているのである。ところで生み出すという営みがいかに捉えがたいものであろうとも、少なくとも次のことだけは明らかである。すなわち生み出されるものは、生み出すものの気分に発しているということであり、天才の所産が卓越して人目を引くように、生み出すものの気分に似ているということである。それゆえ有機的存在が生み出されるためには、二重の気分、すなわち一方では作用に向けられる気分と、他方では反作用に向けられる気分とを必要とするのである。そしてこの気分は同じ力の内部で、同時に成立することは不可能なのである。

さてここから、性の違いが始まるのである。生み出す力はむしろ作用に、受容する力はむしろ反作用に対応する。前者によって生命を与えられるものを、われわれは男性的 (männlich) とよび、後者が生命を吹き込むものを女性的 (weiblich) と呼ぶ。男性的なもの (Männliche) はすべてむしろ自発性を示し、女性的なもの (Weibliche) はすべてむしろ受動的な受容性を示す。しかしながらその違いは、傾向性にあるのであって、能力にあるのではない。なぜなら、ある存在には、活動的な力と同様に、また受動的な力もあるからであり、さらにその逆もあるからである。何かただ受動的なだけのものというのは考えられない。(他からの作用を受けているという感覚である) 受容するということにはすべて、実際最低限の接触が必要である。しかし活動性の能力をまったく持たないものは、存在たりえず、すり抜けられはするが、接触されることはないのである。それゆえ至る所同様に反作用が、受容として存在する。これに対して活動的な力は、(もしもわれわれが、ここではただ有限な力のみが語られるということ想起するならば)、時間の条件に従うのであり、ある素材に、それゆえ何か受動的なものに、結びついているのである。深い証明にはなお至りえなくても、われわれは、人間の内部に、常に自発性と受容性が相互に対応し合っているのを見るのである。最も自発的な精神は、また最も感じやすい精神でもある。そしてあらゆる印象を最も深く受容する心は、そのあらゆる印象を、また最も生き生きとした活力 (Energie) をもって、はじき返すのである。つまりたださまざまな傾向性が、ここで男性的な力を女性的な力から区別することになる。男性的な力は、その自発性によって、作用を及ぼし始める。しかしその受容性によって、逆の側からの反作用をも受け入れるのである。女性的な力は、まさに逆の道を辿ることとなる。その受容性によって、女性的な力は、作用を受け入れ、自発性をもってそれに応えるのである。

この二重の性格もまた、生み出すということの双方において、直接先行するさまざまな状態を表しているのである。両者において、満ち溢れんばかりの能力の感覚は、切ない欠如の感覚と一對なのである。しかし男性性 (Männlichkeit) が支配しているところでは、生命の力という能力が欠乏にまで至ると、欠乏しているがゆえの憧憬は、ある存在に向けられることになるのだが、その存在が活力と同時に活動の素材を与え、反作用によって受容性を働かせ、燃え上がらんばかりの激しさを緩和することになるのである。これに対して、女性性 (Weiblichkeit) の領域においては、まさに満ち溢れんばかりの豊かさは、あまりに豊かなので、みずからの力だけでみずからに生命を吹き込むには十分なのである。他方欠乏しているがための憧憬は、内的な素材を目覚めさせ、みずからの力に、作用によって自発的な反

作用を強要することでより大きな強さを与えてくれる存在を求めるのである。それゆえ前者の場合には、一点に集中し、ここから外部をめぐり強さがあるのである。みずからの外部に、それは、みずからの内部においては十分に活動することができない素材を求めるのである。後者の場合には、素材の豊かさがあるのであり、それは、他からの対象を一点においてみずからの存在の内部に受け入れ、それとの合一を切望するのである。そのようにして、一方の力は、他方の憧憬を満たし、双方が互いに結びつき合い、調和ある全体へと至るのである。

精神的なものを生み出すことにおいてもまた、ただ単にこの相互作用だけでなく、二つの違った性の同じ違いが認められるのである。生み出すべく定められている心情の状態と、受容すべく定められている心情の状態とはまったく違っているのである。叡智的で道徳的な生における非常に繊細な違いは、ただそれらに気づくだけでもすでに困難であり、それらを表現するとなれば、それよりもさらにはるかに困難である。しかしながら、天才が男性的な力をもっているならば、天才は、生み出しつつ、自発的な理性をもって、理念的な対象に作用することになるであろう。これに対して、天才が女性的な豊かさをみずからのものにしてしているならば、天才は、受容しつつ、この対象の作用を、想像力の優位を保ちながら、体験し、それに応えることになろう。とりわけこの違いは、生み出すということそれ自体に際しての内的気分において明らかになる。しかし修練を積んだ目にも、この違いは、産物のなかにおいては、ほとんど見出せないであろう。なぜなら、天才のあらゆる真の作品は、ただちに、自由で、みずからの内部に築き上げられた、それ自身のやり方における、想像力と理性との捉えがたい一致の成果であるからである。そうではあるのだが、しかしそれにもかかわらず、修練を積んだ目には、時にはより男性的な理性がむしろ深さを、時にはより女性的な想像力がむしろあり余るばかりの豊かさと魅力的な優雅さを感じさせることもありうるのである。

この比較を個々の場合において実際に行うことは、まさにこの違いをはっきりと目に見えるようにするために、二つの頭脳がとにかく十分に類似性を示すということがまれであるがゆえに、すでに多くの困難が伴っているのである。それゆえ、ただいくつかの例を挙げるとするならば、ここではホメロスとウェルギリウス、アリオストとダンテ、トンプソンとヤング、プラトンとアリストテレスを相互に対比するということが許されるであろう。すくなくとも誰も次のことを簡単に否定してしまうことはできないであろう。つまり、これらの人物たちを対比してみた場合、最初に挙げた人物たちのなかには、少なくともかれらのなかから輝き出てくる力に比べ、むしろ想像力の豊かさが支配しているのに対して、後に挙げた人物たちのなかからは、理性の形式がほとんど厳格ともいえる確実さをもって、語りかけてくるのである。同時にこの厳しさと溢れんばかりの豊かさととは別に、アイスキュロスとエウリピデスの中間に位置するソフォクレスは、性概念のない (geschlechtlosen) 天才の例として挙げる事が可能である⁸。

しかし、性の違い一般は、自然の違いとして、形成する意思によって、可能な限り、合一へと高められなければならないのだから、当然のことながらそうした形成に熟練している天才は、かの双方の力を、みずから完全に誤認してしまうに至るまで、純粋な均衡をもたらすべく努めることになるであろう。それゆえこの場合よりもさらに明瞭になるには、実際の生活におけるこの違いである。そこで、高潔な人物が法を尊重するという崇高な感情に満たされ、みずからの義務を果たすことに、みずからの幸福とみずからの命を捧げるところでは、偉大な英雄的な行為が男性的な力をもって、生み出されている

のである。道徳的感覚は、みずからがたくましい力強さのなかにあるのを感じ、義務の声はかれを行為へと促し、かれはその声に従わざるをえない気持ちになるのである。これに対して、美德が想像力と結びついて、その優雅さで魅惑するところでは、かの道徳的感覚は、生み出すよりもむしろ受容するのである。それは、想像力の手から快い形態を受け取り、親密にそれに同調し、それをみずからの存在と一体化しようと努めるのである。そして、そのようにして生み出される高潔な行動は、完全に自由で自発的な力の所産というよりもむしろ、反作用の力の所産なのである。

生み出す力と受容する力それぞれの特徴は、それらの力の最高の活動の瞬間に認められるのであるが、またそれらの存在の全体を通して現れるのである。至る所で前者からは生み出す力がみずからの豊かさから自由に与えることによって語りかける。後者においては至る所で受け入れられたものをしっかりと包み込むことによって捉える強さが明らかに見てとれる。しかしわれわれの視線は、不注意にも存在の静かにある部分を見過ごし、常にただその作用にのみ向けられるのであるが、それにもかかわらず、自然の力が永続することができるのは、まさにこの気づかれない生によるのである。そうであるならば、その存在とは、たえず活動を促す不断の作用以外の何であろうか。われわれは、その活動の流れのうちで、不断の努力が力をついに溢れんばかりにする究極の部分だけを垣間見るにすぎないのである。ただ身体的な作用だけが、われわれの粗野な感覚を触発するのであって、生きとし生けるものが、直接存在しているということによって広める、繊細ではあるがしかし力強い影響は、あたかも目に見えない息吹のように、われわれからすり抜けてしまうのである。まさにそのようにして、今やまた、生み出し、受容する力には、受け継がれていくということの配慮だけが委ねられているのではないのである。すなわち単にわれわれの目の前で行われる生み出すということだけが委ねられているのではない。維持するということもまた委ねられているのである。有限なるものを維持するということはたえず反復される生が結びついている不断の死でしかないのだから、われわれには隠されている再生産もまたその仕事なのである。それゆえ、たとえ自然が永続という目的を別の方法で達成することができるのだとしても、自然は、それにもかかわらず、性の力が互いに補い合う、相互作用なしで済ますことは決してできないであろう。

有限な手段によって無限の目的を追い求める自然は、みずからの建造物を力の対立の上に建てるのである。すべて制限されているものは、破壊に向かうのであり、安らかな平和は、ただ自足する活動範囲のなかには存在しないのである。それゆえ一方の破壊的行為に対して、他方はそれを補うべく努力しなければならないのである。そして双方が相互に究極目的を無に帰せしめることによって、それらは自然の無限の計画を成就するのである。しかし自然がまたこの勝利を取めるのは、ただ自然がその全体の広がりにおいてそれぞれの時期のすべてを長期にわたって観察できるときだけなのである。あるいはむしろその勝利はただ自然の諸法則の内容のなかにもみあると断言してよい。それぞれの個々の時期には、闘いはまだ続いているのである。そして完全なものを求めつつも、自然は、可能な限り最高のものを所有することで満足しなければならない。自然は、制限を取り除くことはできないのだから、ある力は、別の力の欠落部分を埋めなければならないのである。そして、それぞれの活動はついにはみずから消耗してしまうのだが、無為は許されないのだから、休息は、活動が入れ代わるところに、存在するに違いないのである。なぜなら、最高の力は、矛盾する条件の一致を要求するからである。休息を知らない努力と、辛抱強い持続が、結びついていなければならないのである。しかし、努力は、燃え尽きていく火である。緊張を失わないために、それは、ありとあらゆる妨げるものからみずからを解放しなければ

ばならず、そしてみずからが所有する資質を精力的に凝縮させなければならないのである。そうすると、すぐにまたまさにそのなかでとりわけ無機的な自然がさまざまな目立った例を示している多くのことによって力強くなった力が現れ、そのようにして、そこでは、そもそもただ、多くの個々別々ではあるが、偶然結びついたさまざまな部分が一つになった強さが、作用することになるのである。今や努力は、受容性を排除することによって、みずから快い安らぎを享受するのである。これに対して、忍耐強い持続力にとって必要不可欠な抵抗の強さには、むしろ外からの作用をはね返すよりも、受け入れる能力、耐える気持ちが、それゆえより豊かな素材が必要なのである。しかしもしもこの素材がみずからの内部に引きこもりながらも、外からの活力と取り組むことを課せられているのであれば、それはそのことによって、みずからに、自発的な努力をする可能性を禁ずることになるのである。つまり創作力(Dichtungskraft)は、燃え盛る火のように、次から次へとイメージを創作する時には、感覚を外界の印象に対して閉ざすことになるのである。だから、これらの感覚は、生き生きとした温かさで現実を包み込んでいる時には、創作力が大胆に虚構の世界に飛翔していくのを妨げることになるのである。

生命を与えるべく定められている男性の力(die männliche Kraft)は、おのずと、しかもみずからの運動によって終結していくのである。男性の力は、その力がもつありとあらゆる素材を完全なまとまりへと凝縮させていく。素材が豊かで多様であればあるほど、凝縮する努力(Anstrengung)は骨の折れるものになるのだが、またその作用はますます大きなものになるのである。素材は、ただそれ自身の本性によって結びついていくものではない。素材は、支配的原理としての男性の力によって、導かれるのである。男性の力は、みずからの内に集中し、内から外へと作用する。激しい衝動によって活動的であるべく生気を吹き込まれ、男性の力は、みずからが貫通していくべき対象を見つけだすことを願うのである。しかし、ただまったき自発性(Selbsttätigkeit)であるにすぎない男性の力は、この瞬間は、ありとあらゆる受容性(Empfänglichkeit)から閉ざされているのである。しかしそのような努力のあとにすぐに続くのは、消耗なのであり、だから男性の力は力強く生命を吹き込むのだが、しかしそれはすぐに消えてしまう息吹にも似ている。弱まっていく力の感覚とともに、男性の力のなかに受容性への憧憬が目覚め、そしてその男性の力は、以前はただ創造的であったところでゆっくりと休息することを望むのである。そのようにして、男性の力は、本来のもの、それ自身によって、それ独自の形式になるのである。男性は、大胆に行動せんとする勇気に胸も震えんばかりになり、心が締めつけられるのを感じるのである。かれは、観察する精神をもって、人生の多くの経験を重ね、高い理想をおのれの内から生み出してきた。さまざまな感情がかれを衝き動かす。その感情は、ある時はかれが憧れる新しい創造の気高さであり、またある時は、かれが高め純化しようとする存在への思いやりのある共感である。すべてこれらの崇高なイメージのために、彼の胸は十分な余裕がなくなり、活動への熱い渴望が、かれを駆り立てるのである。かれはみずからの憧憬に相応すべき世界を求めるのである。利己的ではなく、みずから享受するというあらゆる考えからかけ離れて、その世界を全力で豊かにしようと努めるのである。新しい創造が生まれてはじめて、かれは、喜びに満ちて、みずからの子どもたちを見つめながら、安らぐのである。

女性の力(die weibliche Kraft)は、反作用と規定されており、未知の対象へ向かって集中し、しかも未知の魅力によって集中するのである。女性の力があり余るほど豊かにもっている素材は、それ独自の本性によって、一体化するものなのであるから、自発的な能力によってよりも、むしろ受動的な能力によって、作用するのである。その多様性の程度とともに、同じように、作用の美しさも大きくなるの

であるが、しかし同時に「男性の力とは異なり」努力もまたそうなるわけではない。むしろこの努力は、さまざまな接点によって軽減されるのであり、その程度はただ相互の調和に依存する抱擁の親密さ (Innigkeit des Umschliessens) によって規定される。女性の力の素材は、統合する原理の支配を必要とするのではなく、むしろ、みずからの同質性によって、結びつき合うのである。この一体性 (Einheit) において、女性の力は、作用に対して、ますます高まる情熱をもって応えるのであり、ついにはそのすべての活動は緊張の極に至る。しかし独自の本性が、女性の力に抵抗を受けやすくさせ、男性の力を消耗させる燃え立つばかりの激しさから女性の力は解放されているがゆえに、女性の力は、その作用の緩やかさを長期間の持続によって償うのである。それゆえ女性の力は、みずからの素材そのもののあり方に、それによって準備され支えられる作用の一部を負っているのである。さまざまな感情に動かされ、崇高な勤勉さに満たされ、みずからの内部は豊かであると感じているのではあるが、しかしみずからに自分自身の方向を与える大胆な勇気を欠いている心 (Herz) は、不安な憧憬に苛まれるのである。みずからは理解できず、豊かさの内奥は貧しく、その心は、みずからの感情のもつれた結び目を親切にほどこいてくれるであろう存在を見つけ出すことを願うのである。この混乱した気分の源泉が、深く隠されていればいるほど、その心が願いを叶えることは、困難になるのであるが、しかし見出された現象にますます親密に同調することになるのである。その心がその現象に長く留まれば留まるほど、それはより多くの接点を見だし、萌芽が完全な果実へと成熟するまえにそこを去ることはないのである。

つまりその程度によってではなく、ただその類のあり方によって、生み出す力と受容する力は、相互に異なっているのである。ただ単に受け入れるということでは、受容するということにならず、それよりも下位に位置するということは、ちょうどただ単に与えるということが、生み出すということより下位に位置するということと同じなのである。その双方、つまり産出と受容は、より高く、より力に満ちた活力なのであり、双方ともに与え、受容することによって、生み出すのである。みずからの実りある豊かさは、産出の場合には断念されるものを伴わなければならない、受容の場合には受け入れられたものを包み込まなければならない。双方の力の真の性格の違いは、受容する力にはむしろ資質 (素材) が、すなわちむしろ身体こそが特質であり、魂 (Seele) があらゆる自発的な原理を表すのだとすれば、生み出す力にはむしろ魂こそが特質であるという点にある。しかしまさにこの違いによって、それらは自然の要請に応えるのである。もしも男性の力の破壊的な激しさに別の力が対置されなければならないのであれば、それはけっして同質のものであってはならないであろう。もしそうであったならば相互の消耗戦の果てに、闘いは終わってしまうはずだからである。その闘いにおいて、自然のなかでは至る所で起こっているように、敗者自身が、新しい生を、勝者の手から受け取らなければならないのであろう。それゆえ溢れるばかりの豊かさには、欠乏が対置されなければならないのである。しかし自然は、みずからの領域において、欠乏も自足も許さなかったのであるから、欠乏は再び豊かさと結びつくことになるのである。ところであらゆる男性的なものは集中した活力 (angestrengte Energie) をもち、あらゆる女性的なものは忍耐強い持続力 (beharrliches Ausdauern) をもつことによって、両者の絶えざる相互作用は、自然の無制限の力 (unbeschränkte Kraft) を形成し、その努力は決して止むことなく、その休息は決して無為になることはないのである。

つまり何かを生み出すためにはすべて、二つのものが必要なのである。一点に集中する生き生きとした活力と、それがみずからのあらゆる地点に流入してくることを受容する素材の生き生きとした豊かさである。だから前者は、その本性によって、分離 (Trennung) に向けられることになるであろう。

というのも、生き生きとした活力でないものはすべて、その純粋な作用においてことごとく行く手を妨げられるからである。後者は、あらゆる側から作用してくる力を包み込むために、統一性 (Einheit) へと向けられることになるであろう。(これらの現象は、生み出す存在の全体の連なりによって、同じものなのであるから)、天才が、理性の純粋な自発性によって、火花のように、そこからすばらしい作品がほとぼしり出てくる生命を吹き込む炎を発する時にはいつも、想像力 (Phantasie) はその炎を懐に受け入れ、慈悲深く包み込まなければならないのである。生み出す力は、もしもこの努力を妨害するものすべてをはね返すのでないならば、精力的に集中することはできないであろう。受容する力にとっては、もしもみずからの内部の最高の調和 (Übereinstimmung) を維持することがないのであれば、ありとあらゆる側から一点に集結していくことは不可能であろう。生み出す力を突き動かす激しさは、個々別々の視点に向けられるのであり、その留まるところを知らない作用は至る所で分離と破壊をもたらす。これに対して、受容する力は、調和ある柔和さをもって応ずるのであるが、より多く包摂する一体性を原則とするのであり、その成果は維持ということなのである。生命を吹き込むべく定められているものは、刺激によって覚醒させなければならない。しかしあらゆる刺激は、注意を個々の状態に向けるのであるから、全般的な無関心の感覚は、まどろみあるいは死であろう。それゆえ生命を吹き込むものは、きわめて大いなる寛大さをもって、あらゆる衝撃を避けてはならないのである。これに対して生命を吹き込まれる素材は、均一なものでなければならず、その生命を吹き込むものに完全に浸透されなければならないのである。結局より多くの形式をもつものは、確かに結びつくことを目指すのであるが、しかし形式一般がそうであるように、ただ分離によってのみそうなのである。それはちょうど、素材そのものが確かにみずからの内部に多様なものを含んでいるのだが、素材にとって自然であるものは、しかしなおわずかにしか分かれていないのと同じことなのである。

男性の性格と女性の性格が明らかになるところではどこでも、その性格のうちにこれらの側面が認められることになる。男性の性格のうちに認められるのは、分離する激しさでもって生み出そうとする努力 (Streben) であり、女性の性格のうちに認められるのは、結びつくことによって維持しようとする苦勞 (Bemühen) である。自然の全体を貫いて、しかしとりわけ人間において現れる両性が纏っているあらゆる特性は、そのさまざまな印象を与えるのである。女性の魅力的な優雅さと愛すべき豊かさは、感覚を揺り動かす。直観的というよりは具象的なイメージの仕方が、そしてあらゆる概念を感覚的に結びつけることが、想像力に、豊かで生き生きとした像を与えるのである。あらゆる印象に対して感受性があり、どんな印象にもそれにふさわしい親密さで応える性格の調和、この性格の調和が感動を呼ぶのである。そのようにしてすべての女性的なものは、とりわけ人間全体のその根源的な単純さを示す力に対して働きかけるのである。これに対して、男性およびその性に属するものは、この単純さを満足させることは少ないのだが、しかしさまざまな概念についての能力をより多く働かせるのである。その形態 (Gestalt) は、優雅な美しさよりもむしろ明確さを有している。その概念は、より明瞭にそしてより注意深く分けられているのだが、しかしまた容易な結びつき方はしない。性格は強く、はっきりとした傾向を有しているのだが、しかしまた一面的で、かたくなであるように思われることも稀ではない。それゆえすべての男性的なものは、より啓蒙的 (aufklärend) であり、すべて女性的なものは感動的 (rührend) であるということが出来る。一方はより光を、他方はより暖かさを与えるのである。有限な自然のなかでは生はつねに死と隣り合わせであり、より善きものだけが善くないものにとって代わるのだから、すでに存在しているものは新たに存在するものに道を譲らざるをえないのである。ところ

で、みずからの決断に駆り立てられて、我を忘れて活動する力は、障害を破壊的に取り除くのであれば、まさに暴力的に表れるほかないような恣意を伴って行動するに違いない。それゆえ偉大なことを成し遂げようとする勇氣は、ある種の厳しさなしには考えられないのである。しかし新しく生み出されたものは、女性的な思いやりをもって育まれなければ成長することはないのだから、真に行動する生に生まれついた天才にあっては、穏やかな柔和さは、厳しさを真の堅実さへと変えるのである。

なぜなら、ただ両性の特質を結びつけることだけが、完全なものを生み出すからである。そしてもしも男性的なものを研究することが悟性 (Verstand) をより持続的に働かせ、女性的なものを考察することが感覚 (Empfindung) をより生き生きと働かせるのであれば、ただこの両者を結び合わせることだけが、あるいはむしろ純粋な存在が、あらゆる性差 (Geschlechtsunterschied) から切り離されて、観念の能力としての理性を満足させるからである。最高の統一がもたらされるためにはつねに二つの対立する傾向性が必要なのである。統一 (Einheit) というものは、そもそもただ豊かさのなかから生ずる時のみ価値をもつのであり、決して欠乏のなかから生ずる時ではない。だから個々の部分の強さと形成は、あらゆるものの関係の緊密さに劣らず大きな意味をもっているのである。ただ個々のものを訓練するために、分離 (Trennung) が要請されるのであり、まさにこの分離が結合 (Verbindung) の可能性を限定するのである。ところで一方の性は分離を、他方の性は結合を促すのであるから、両者は、相互に作用し合うことによって、共同して自然のすばらしい統一 (Einheit) を促進するのである。そしてこの統一は、全体をきわめて緊密に結合すると同時に、個々を最も完成された形に形成していることを示すのである。

なぜなら、根源的に始まる活動が生み出す力にとって固有のものであると同様に、それに応える活動が受容する力にとって固有のものであり、また両者の共同の作品として生み出されたもの (Zeugung) は、このようにしてそれらの間に配置されるからである。あらゆる産出 (Hervorbringung) は、ある素材 (Stoff) を前提としている。なぜなら自然は、ただすでに存在しているもののみ新しいものを結びつけるからである。この素材は、形成されていくものであり、しかも衝動によって形成されるのだが、その衝動は、固有の力で、そして (前述したように同質のものを生み出すように見える) 規則に従って活動するのである。だがこの素材は、この衝動に至るべく、この衝動に先行する未知なる活力へと覚醒されなければならないのである。そしてこの覚醒は、(最も一般的な理解における) 形成衝動⁹ (Bildungstrieb) と原材料 (rohen Stoff) との結合としての、生の始まりなのである。この形成衝動の最初の仕事は、形成そのものであり、この形成が成就するとは、有機体が偶然失うものを補うことなのである。しかしまたそれ以外に、形成衝動は、一度完結して形成を維持するために、絶え間なく活動し続けるのである。なぜなら、物質の法則、ここではとりわけ化学的親和性は、生の法則、つまり有機体の法則に絶えず対抗するものであり、そして生命とは、近年の研究結果が示すように、前者に対する後者の勝利に他ならないので、この優位を保ち続けるためには、不断の闘いが必要であるからなのである。ここで働いている原理は、よく生命力と呼ばれているものであるが、(狭義の理解における) 形成衝動は、これをただ特別なものへと変化させるのである。それゆえ産出には、二つの不可欠な要素、つまり原材料とそれに生命を与えて形成させることが必要なのである。

これらの両者が、生み出す力と受容する力に分類されることになるのであれば、素材は受容する力に、生命を与えるものは生み出す力に当てはまるとするのが自然であるように見える。少なくともこれまでの考察から、生み出す力においては活力が、受容する力においてはその活力が作用する (対象であ

る) 本源的に存在するものが、より高いレベルで明らかにされた。そのようにして産出力という観点において、生み出す力にはむしろみずから発する火が、受容する力にはむしろ迎えつつ作用する強さがあるように見えた。作用の統一という観点においては、生み出す力にはより強い統合する原理が、受容する力にはむしろ個々の自主的な一致が、独自のものとしてあるように見えた。また自然を観察してみれば、ざっと見渡しただけでもいたるところに、男性のなかにはむしろ力の表現が、女性のなかには、確かに相対的にはあるが、そこから輝き出てくる力に比べて、むしろ豊かさの表現が、発見されるのである。

しかしながらどんな純粋な分類も、それはすでに自然法則の類似と矛盾するのである。なぜならわれわれの観察が及ぶ限り、自然はたえず最高の豊かさを、最も単純な方法によって作り出そうと努めながら、異質な作用をする存在を、その程度によってというよりはむしろ、その力の傾向性によって、相互に区別しているということがわかるからである。ところで、まさにそのようにしてまた受容する素材においては、生み出す素材におけるよりも、産出の瞬間には少なからざる力が作用するのである。そして違いは両者が相互にどのようにそうであるかというそのあり方にのみあるのである。男性においては、すべては作用することのみ向けられているのである。その素材は、ただその作用にいわば身体を与えることによって、その作用を強めるべく規定されているのだから、その作用は、その素材をほとんどそれ本来の本性を抹消するに至るまで、みずからに同化しようとするのである。これに対して、女性においては、すべての気分は反作用へと向かう。力は、この反作用を、素材において高めようとすることによって、その素材を大いなるいたわり (Schonung) をもって扱うことになる。それゆえ本来生命を吹き込むということは、両性によって、同時に起こることなのであるが、ただ男性の力は実際ただ覚醒を引き起こし、女性の力はただその可能性を準備し、その持続性を守るということなのである。もしも同時に、その素材が属する存在自体の活動が起こらないのであれば、生命を吹き込む力は、決してその素材に作用することはできないであろう。もっとも強力な作用でさえもただ反作用があることによって、それ独自の存在へと受け入れられていくのであって、これらの領域全体の範囲から、有機的自然は、ただ無為なる受動を排除してきたのである。有機的自然は、それぞれの性に、生み出すことに不可欠な双方の力を与えたことで、一方の側の力の欠如が他方の側の (力の) 優勢となって、いわば転換 (übertragen) されうるということを可能にしてきたのである。男性の力に強さが欠けているところでは、女性の力の活発さ (Lebendigkeit) が、なお実りの可能性を救いするのであり、このことを経験が実際に証明することも稀ではない。そして逆もまたありうるのである。つまり女性の力が、受容のためには足りない素材しか提供できないところでは、今度は男性の力がこの欠如を補いうるのである。ところでもしもこのことが、機能 (Function) を実際に交換することによって、あるいは、さらにありそうなことなのだが、一方の弱さが他方の異常な強さのおかげで覚醒され支えられるということによって、説明されるのであれば、そしてその強さは、そのことを行うのに十分すぎるほどに十分であることで、相手の役割を軽減するのであるが、もしもそうであるならば、このような事例は、まさに母親の一時的気分が胎児のあり方に影響を及ぼすように思われる場合のように、ここで語られたことを、経験的にもまた証明しているのである。しかしながら、もしも生み出すことと受容することの双方が素材と力を必要とするのであれば、受容することにおいては、素材はただ、力が素材なしでは作用することができないという理由においてのみ不可欠であり、受容することにおいては、力はただ、それなしでは素材に対する作用は起こりえないという理由においてのみ必要である、ということになる。それゆえただ

両性の主要傾向についてのみ語るのであれば、それにもかかわらず、産出の際の力はただ生み出す性に属し、素材はただ受容する性に属するのである。

自然はその最も神聖な像を聖なるペールのうちに覆い隠しているのであるが、自然がそのペールを貫通するということには、すでにこの対象に関する多様でまったくさまざまな理論によって表されるという困難が伴っている。それにもかかわらず、これらの理論のうちで最もありそうなものは、今ここで語られたことと、まったく一致しているのである。自然が、生み出すということと受容するということとを、二つの異なった存在に委ねてきた至る所で、素材は受容する存在のなかにあり、生命を吹き込む原理は生み出す存在のなかにあるのである。しかし、両者が互いに結びつけられようためには、さらにまた、前者の活動が付け加わらなければならないのであって、それによって素材の一部が切り離され、胚芽がさらに形成されていくことになるのである。それゆえ、自然は、その最も密やかな仕事場においてこそ、創造的に作用することが最も多く、機械的に作用することは最も少ないのである。まさにここでは、作用が原因から想定されることが最も少ないのである。むしろたった一つの火花が、また別の火花に火を点すのである。このことを最も深く感じてきた人びとは、この現象をかの因果関係というあり方によって説明しようとした人々であった。というのも実際、人間の悟性には、ここでは生ずる原因を探し出し、その結果を考察しはするが、説明はせず、ただ黙って賛美すること以外に、つまり、偉大な工場主に対して謙虚に最高の敬意を払うこと以外に何も残されていなかったからである。それはただ近年の哲学的自然学だけが到達することができたのである。自然が、いわば必要不可欠と思われる限りにおいて、かの身体的力を利用することによって、自由を、すなわち精神世界のこの偉大なる特権を、みずからの世界 (Reich) の別の領域にも広げていこうとするのを見ることは、すばらしいことである。自然は、ただほんのわずかな素材を取り上げ、ただ最初に生命を吹き込むために、未知の (fremde) の力を借りるのである。最初の火花が輝くと、それは、みずからの力で燃え上がり、養分を受け取るのであるが、しかし、それをみずからの法則に従って使うのである。

あらゆる現にある存在に対する敬意、そしてその存在に、みずからの恣意によって、一定の形態 (Gestalt) を与えようとする努力が至る所で、女性と男性の性格を表し、そしてそのようにして、両者は共同して、自然の偉大なる究極目的、形式と素材の絶えざる相互作用 (Wechselwirkung) を実現するのである。形式と素材は、直接対置され、相互に敵対しなければならないであろう。しかし、両性にとって特有の作用の仕方において、形式の厳密さは、それが受け入れなければならない素材によって和らげられ、素材は、形成する力によって受容の準備がなされるのであるから、今や内的な合一が可能になるのであり、その合一にこそ有機体の秘密の基礎がある。すべての相互に作用する力が他方の力を必要とする必然性は、生み出す力と受容する力をもまた相互に依存し合うことにするのである。しかしながら、生み出す力に対して、実際必ずしもそのすべてがそれ自体のためだけのものとしてあることを禁じられているわけではない。これはまた受容する力に対してもまったく同様なのである。そしてこのことがそれぞれの側の大きい独立性を基礎づけているのである。しかし、まさにそれゆえに、対立する力は、あらゆる結びつきを最高に促進する手段なのである。そして今まさにその結びつき方が最高の存在を自然のなかで維持し続けるのであるから、対立する力は、その内的なあり方によってますます切実にこのことを促進するべく規定されているのである。対立する力は、自然の全体のなかで本来結びつける絆と見なされうものなのであり、みずからの活力に生命を吹き込むことができる対象を最も熱心に探し出し、見出された対象のもとに最も長く留まるものなのである。

こうして留まることによって、受容する能力は、忍耐強い持続力へとようになっていく。はるか遠くをさまようよりも、みずからの内部に戻ることを、本性そのものによって促されて、すべての受容する存在は、恒常的で変化の少ない動きに結びつけられるのである。近づいてくる力に持続的な強さを対置するために、分離しているものを結びつけるために、そして作用に応えるために、それらには調和を求め、同調を求める努力が必要なのである。受容することには、また同時に胚芽 (Keim) の形成が結びついているのであるから、この胚芽の形成は、しばしば複雑な有機体 (Organsation) を必要とするのである。そして少なくとも、自然は、この目的を誤らないために、このことに定められている存在を倍の注意深さで、みずからの法則に結びつけなければならないのである。しかし持続力とは、有限なるものの定常性なのであり、だから自然はまた、それなしではただ無常な存在であらざるをえないであろうすべての他の存在に、真の内的価値と最も美しい外的輝きを与える、この究極の特権をも、とりわけおのずからそして自由な好意によって、受容する力に、与えるように見えるのである。

しかし持続力 (Beharrlichkeit) が価値を持つのは、ただそれが活動の法則である場合だけであって、無為になり下がってしまう場合ではないのである。ところで、女性は持続力という原理を有しているのではあるが、また同時に活動という別の原理をみずからのものとして有しているわけではなく、男性の側からの相互作用という原理を期待しなければならないのである。破壊することさえ恐れないほどの大変な激しさで作用し、未知の素材をみずからの恣意によって形成しようとする力は、倦むことのないものなのであるが、しかしまた容易に交代されるものなのである。その力は、みずからの内部に、増大していく努力を捉える十分な余裕を見出しえないので、休息は耐えがたいのである。そして、その力は、素材のあり方に耐えきれなくなってしまうからというよりは、むしろみずからの火によって生命を吹き込まれるのであるから、その活動の恒久性は、保証されないのである。そもそも恣意がわずかしか、あるいはまったく支配していない自然の部分においては、このことはあまり見えてこないのである。しかしもしかすると、それはまたただこの領域における多くのことのように、ほとんど観察されておらず、せいぜい他の領域における経験がここではただ概念から推論されるこの主張を証明するだけなのである。もしも人間が、理性が規定する理想 (Ideal) に到達するべきものであるのなら、男性は、みずからの自然な活動を確たる法則に結びつけなければならず、女性は、みずからの存在に刻印されていると感ずる法則性に内的衝動による活動によって生命を吹き込まれなければならないのである。しかし、もしも理性の努力がここで自然の傾向に従うのであれば、両性の二重の誤りはおのずと再び相殺されることになるのである。さまざまな特質を与えられながら、それにもかかわらず互いに離れることができず、両性はおのずと全体の究極目的に相応する範囲にみずからを限定していくのである。

自然は、その全体の広がりを観察すれば、不変である。自然の力の活動は、決して休息することはなく¹⁰その法則には常に同じ服従が続くのである。しかしこの活動を変わることなく維持するために、自然は、両性の相互の特質のなかに強力な支えを見出すのである。自然は、一方の性から無休息 (Rastlosigkeit) を受け取るによって、他方の性からは恒常性 (Stätigkeit) の保証を受け取るのである。

このようにして、両性の間でこの無限の全体を形成することを可能にする機能が割り振られているのである。ただそのことによってのみ、自然は矛盾する特質を結びつけ有限なものを無限なものに近づけることに、成功したのである。なぜなら至る所で集中的な活動が平穏な存在を脅かすと共に、維持される安らぎは、活発な活力に没落をもたらすからなのである。それゆえ自然は、息子たちには、力と火と活発さを、娘たちには、自制と暖かさと親密さを吹き込んだのである。ところで、一方がみずからの領

域を拡大しようとするのに対して、他方は、その領域を慎重に、その範囲内で、豊かにするのである。なぜなら男性の全性格は活力に向けられているからである。かれの力、破壊的な激しさ、外部に働きかける努力、倦むことのなさは、そこを旨とするのである。それに対して、女性の気分、持続的な強さ、結びつく傾向、作用に応える性向、そして温和な恒常性は、ただ維持と現実存在 (Dasein) に向かうのである。それゆえ、共通の慎重さをもって、両者は、自然の二つの大なる操作を行うのである。すなわち、永遠に回帰しながらも非常にしばしば異なった形態で現れるのであるが、生み出すということと、生み出されたものを育成するということである。しかしながら、それらの独自のあり方をさらに詳しく互いに比較し合えば、自然は受容する力をいっそう手厚く庇護してきたといえる。受容する力は、自然とその決定的な利点を分かち合い、まさに家にいる娘のように、心を配る母親にますますびったりと付き従うのである。

存在は、活力を吹き込まれて、生命 (Leben) となり、最高の生命は、自然のありとあらゆるさまざまな力の努力が一つになっている究極の目的なのである。両性の差異が、この目的を達成することを促進し、あるいはむしろそれらの独自のあり方が自然の力をその目的へと導いていくのであるのが、自然の力自身はそのことを意識してはいないのである。なぜなら自然のいかなる力も、手段としてある目的の役に立っているわけでもないし、未知の意図を志向しているわけでもないからなのである。すべての力が調和的に作用しながら、それぞれただみずからの行動に従うのである。そしてあらゆる力の活動の最終結果は、ある必然性に発するのであり、それはあらゆる意図を排除するのであるから、一見したところ偶然のように思われうるのである。ところで、二つの性の力もまた、同じく自由に作用し、そのようにして二つの有益な形態と見なされうるのであり、それらの手から自然はその究極の完全さを受け取るのである。しかしそれらがこの崇高な規定に適うのは、ただそれらの作用が相互にかみ合う時だけであり、一方が他方に憧れをもって近づく傾向性こそが愛 (Liebe) なのである。それゆえ、そのようにして自然は神性 (Gottheit) に従うのである。その配慮は、かのギリシア人がすでに予感的な叡智感覚をもって混沌の整理を委ねていたものにほかならない。

(すぎた・たかお／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科教授
かんの・けん／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科准教授)

注

- 1 原語はUnterschied der Geschlechterである。Geschlechtsunterschiedは「性差」と訳した。
- 2 原語はEndzweckである。
- 3 原語はOekonomieである。
- 4 原語はGattungであり、種とも訳せるが、Menschen Gattung (人類) が含意されているので、当時の一般的用語法に従って、ここでは「類」と訳した。
- 5 原語はSchöpfungであり、神の創造が含意されている。
- 6 原語はLeben und Organisationである。
- 7 原語はVermählungであり、「結婚」という意味が含意されている。
- 8 この文はアカデミー版では脚注に置かれている。訳文中のこの文の前後の二つのパラグラフは、原文では一つのパラグラフになっており、分かれていない。
- 9 この形成衝動 (Bildungstrieb) という言葉は、シラーの『美的教育についての書簡』 (Brief über die ästhetische Erziehung

des Menschen, 1795) にも登場する用語である。本論文が、シラーの同書からの影響を強く受けていることは、内容的にも本書の随所から想起される。

10 初版では「さびつくことなく」(rostet) となっている (アカデミー版注)。